

## 山の頂を立てる

高松市立林小学校 四年 菊池 ひより

私は、山に登る。毎週田曜日、家族と犬と登る。

六才の時から山に登り続けてくるのは体力作りのためだ、と母が始めたことだった。

今までで、216座の山を登った。香川県の山は全て登つており、四国百名山を完登することができた。

大型連休の時や、土曜を使って本州の山も登る。だが、四国の山は本州にもおどりない山だと感じる。なぜなら、とにかく登山者が多く登り立たせがあるからだ。

日本百名山も選ばれてくる、石づき山やつねや山は標高一千メートル近くあるものの、登山道はきれいにせこじられており登りやすい。

しかし、四国百名山はきれいな登山道ばかりではない。草がしづついていたり、登山道がぐずれてしまったり、道はばか綿くさけんだつたりと、ナシで安全な登山道ばかりではない。だから登山を始めたころの私は、よく弱音をはいていた。何時間も山道を歩くことになれておらず、

「もうつかれた。帰りたい。」とか、「歩きたくない。」と、囁いていた。

それでも、と中で帰れるわけもなく、文句を言しながら歩き続けた。

「他の子は、サッカーや野球などで汗を流してがんばって運動している。あなたは、それが登山なの。あなたもがんばらなさい。」

と、母に何度も言われたが、（私は私だ、知つたこっちゃない。）と、機嫌を悪くして歩いていた。

夏は暑いし、冬は雪がつもるからとても寒い。それでも二年間登り続けてくるのは、山の頂上に着いた瞬間に、あの何とも言えない気持ちの良さを私は知つてこなかつた。

山の頂きに立つすばらしさ、がんばって登った者しか味わえない特別な時間だ。山と雲が私の頭の近くを通り、家や山も何もない絵にかけたような青々とした山々が、私をかんげこしてこめるよにこまつ大山がる。

どう感激のあら、すんだ気をめこみ肺の中に取り込んで、周りの山々」「やつほーー」と、叫ぶ。山の頂を立つ時間を味わうために、私はあの長い時間を歩き続けるの

だ。

私のような十才にもみたない子どもが登ることがまだまだめずらしく、と中では  
れちがう登山の人達にあこがれをすらる、必ず「がんばれ。」や、「やういね。」と、声を  
かけてくれる。「の言葉にとてもほほえむことにならぬ。」これも、登山を続ける理由の一  
つかもしれない。

今、四国百名山の内、58座を登り終えてる。六年生にならぬひつぱりは、完登したい  
と考えてる。

ただ、高知県や愛媛県、とく島県は家から遠くそいつた何度も行けないので、そんな時  
は、里山をこぐつも登つてトレーニングをする。おかげで、体力はついてきた。  
そして、何といつても登山の後に食べるトマトメシは最高だ。がんばった!」ほうびに、食べ  
たい物を食べさせてくれる。おなかがペーぺーのじゅうたいで、ガツガツと食べるトマトメシ  
は、体も心もみたされてゆくと実感することができる。

この先、私が大人になった時、山に登り続けよう!とがどんな風に生きられるのか分か  
らない。もしかしたら、日本一高い山に登つて、外国の山にも登つて、強くてチャ  
レンジャーな女せいになつていいかもしれない。未来のことは分からぬが、そんな大人に  
なればいいなと思つ。

山の頂きには、何もない。テレビもないし、ゲームもない。けいたいは圏外だし、おもち  
やもない。ただ、同じまでも広がる空と、白く大きな雲、サンサンとうす太陽に、ゆうだ  
な山があるだけだ。

そんな場所で家族そろつて同じけしきを見ながら頂きメシを食べ、少しの時間を山頂で  
すゞす。山の頂きとは、特別な場所でもあるのだ。  
だから、自然といふな余話になる。

「幸せだね。」と。

私は、山に登る。それは、山の頂きに立つためた。これから的人生、私は登り続ける  
だらう。

最後に、こつも私を山へ連れてってくれる家族に感しゃを伝えたい。ありがとう。これ  
かうむよろしくね。